

地域スポーツ活動における特別な教育的支援を要する児童と周囲児との相互的関わり

○鷹野遥香

(山梨大学大学院教育学研究科)

吉井勘人

(山梨大学大学院教育学域)

KEY WORDS: 地域スポーツ 特別な教育的支援を要する児童 交流活動

I. 問題と目的

現在の我が国では、「共生社会」の実現に向けて、障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会を目指している。

スポーツ庁では、障害のある人もない人も共に実践できるスポーツの必要性を述べている。しかしながら、地域のスポーツ活動を通して障害のある人とない人の交流やコミュニケーションに着目した実践研究はみられていない。

学校教育では、障害のある人とない人が共に関わり合う交流及び共同学習が推奨されている。文部科学省(平成21年以前)は、障害のある子どもが地域社会の中で積極的に活動し、その一員として豊かに生きる上で、障害のない子どもとの交流及び共同学習を通して相互理解を図ることが極めて重要であるとしている。一方で、交流及び共同学習の課題として、障害のある人とない人が関わる中では、集団の中で関係性が固定化すること、児童が消極的になること、交流が深まらないこと、児童間のトラブルが生じることなどの課題があることが指摘されている。それは、地域のスポーツを介した交流活動でも同様の課題に配慮していく必要があると考えられる。

本研究では、地域のスポーツ活動の中での、特別な教育的支援を要する児童と周囲児との相互的関わりの特徴を、「会話」の視点から明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 参加児童 関東圏内の剣道スポーツ少年団に所属する6年生の児童6名を対象とした。

A児(女児)は、小学校において「特別な教育的支援を要する」とされている児童である。スポーツ少年団の活動における行動観察から、A児の仲間関係では、他の児童に対して、自分から話ができないことや、話しかけられたことに十分な応答ができず、受け身的になってしまうことがある。また、集団の中にも、周囲児から孤立してしまう場面がしばしばみられる。

B児(男児)の仲間関係では、仲間との距離感を取ることが難しく、初対面の児童に向かって、唐突に身体接触してしまうような場面や、仲間をからかって逃げるなど、関わり方が独特、不適切である場面がみられる。また、集団で説明を受けている際に立ち歩きや、集団とペースが合わずに単独行動になることがある。

C児(女児)、D児(女児)、E児(男児)、F児(女児)においては、相互的関わりが良好である。

本研究の参加児童6名は、それぞれ別の学校に在籍しており、6名のみで集まって活動することはなく、スポーツ少年団(幼児～中学生までの異年齢集団)数十名の活動の中で顔を合わせて剣道の稽古をする程度の関わりであった。A～F児の保護者からは、同年齢の児童同士で協力する力を身に付けさせたいという要望が挙がっていた。

2. 期間 平成X年1月末～8月末の8か月にわたり、計14回実施する予定である。

3. 場面 活動は月に2～3回程度行う。1回の活動は、剣道場面、ゲーム場面、おやつ場面の3つの場面で構成した。

剣道場面では、支援者対児童6名で、2分間の試合を行った。ゲーム場面では、児童と大学生が対抗の目かくしをしたレースを行った。おやつ場面では、児童がカルピスのカフェを開き、大学生を招待する活動を行った。

4. 記録方法 各活動は、ビデオカメラ4台とICレコーダーで記録を行った。振り返りのための感想の記録を行った。

5. 分析方法 今回は、1、2回目のビデオ映像を分析対象とした。ビデオ映像におけるA～F児の発話、表情、身振り、身体動作などを逐一文字に書き起こし、プロトコルを作成した。相互的関わりについては、West(2012)を参考とした5つの観点(会話、目標設定、計画と役割分担、相互調整、コンフリクト解決)のうち「会話」の観点で分析を行った。

6. 倫理的配慮 研究開始前に対象児の保護者に対して、本研究の目的と方法について文書と口頭で説明し、承諾を得た。

III. 結果と小考察

1、2回目(ベースライン期間)における、児童同士の相互的関わりとして、以下のエピソード1、2がみられた。

エピソード1は、剣道の作戦を立てる中で、役割をじゃんけんによって決定しようとしている場面である。Aは、Bに対して、じゃんけんの参加を拒む発言をし、手を振り払うという拒否的な行動を示したと考えられる(Table1)。

Table 1(エピソード1): 剣道場面/作戦タイム(3月12日)

児童	会話
A	じゃあ、じゃんけんして決めよう
B, E, F	じゃんけんぼん(A以外は、ゲーの手を出す)
A	Bいる?(じゃんけんをし終えて差し出しているBの手を払う)
B	(振り払われた手を見て笑う)
A	もうこの2人【E, F】だけでいい【EとFに手を差し出す】

※(): 動作, 表情, 身振り 【】: 筆者による解釈
※C, D児は欠席

エピソード2は、ゲームのペアを決定し、決定したペアを表に書こうとしている場面である。周囲児が次々にペアを決定していく中で、Bの名前を書いていないことに最後になって、C, E, Fが言及した(Table2)。

Table 2 エピソード2: ゲーム場面/作戦タイム(3月19日)

児童	会話
C	あ、Bやってなくね?
E	あ、そうでした(Bを注視)
B	すっかり忘れてた。俺ちゃんと【作戦】考えてたのに
C	【表の空欄部分は】B?
E	B
F	Bしかいないし
E	うん、いない

※(): 動作, 表情, 身振り 【】: 筆者による解釈
※D児は欠席

IV. 総合考察

エピソード1から、A児はB児が集団に参加することに対しての拒否的態度を示したと考えられる。エピソード2からは、ゲームのペアを決定する中で、C, E, F児がB児とペアになることに積極的に取り組もうとしていないことが窺える。

本研究は、学校ではなく、地域のスポーツ活動を行う中で、児童同士の関わりを分析対象とした。ペア活動に積極的に取り組もうとしないことや、拒否的態度がみられた要因としては、A, B児に対する周囲児の固定化したイメージや、A, B児が自分の意思を仲間に向けて主張することの困難さがあると考えられる。(TAKANO Haruka, YOSHII Sadahito)